三星の風

号外
平成 18 年 7 月 31 日
鹿児島県立
鹿屋高等学校

創立８３年目の快挙！！

野球部が準優勝

第88回全国高等学校野球選手権鹿児島大会

昭和二十六年創部の本校野球部が、七月二日から二十日間にわたり熱戦を繰り広げた第八十八回全国高等学校野球選手権大会鹿児島大会において大正十二年の創立以来初の準優勝の栄誉に輝きました。この準優勝は、選手・監督の功労はもちろんの事ですが、全校生徒・職員および地域の方々の熱き応援に支えて頂いた快挙でありました。本号にて、心からの声援を下さったすべての皆様方に感謝しつつ、今大会を振り返ります。

鹿児島大会準優勝への歩み

１回戦	６－２	鹿児島中央
２回戦	９－０	奄美（七回コールド）
３回戦	10－３	有明（七回コールド）
４回戦	11－０	鹿屋工
準々決勝	５－１	加治木工
準決勝	５－４	れいめい
決勝	７－８	鹿児島工

校長　井上明文

本校野球部が第八十八回全国高等学校野球選手権鹿児島大会において準優勝を果たしました。鹿屋高校八十三年の歴史にさん然と輝く金字塔です。心から健闘を称えたいと思います。高校球児にとって甲子園は夢の舞台、その舞台にあと一歩届きませんでしたが、野球部創設以来五十六年目の快挙となりました。勝ち進むに従って、「大隅半島から甲子園へ」の夢が大きく膨らみ、学校を挙げての全校応援は、球場を揺るがすほどの大声援となりました。またスタンドは大隅半島から応援に駆けつけてくださった、小学生や中学生、高校生、同窓会やＰＴＡの方々で埋め尽くされ、大応援団となって選手達にエールを送っていただきました。選手たちも声援に応えて、力の限り闘ってくれました。闘い終えて銀メダルを胸に行進する生徒たちの姿は晴れ晴れとして見えました。野球部の諸君、夢と感動をありがとう。

三星会会長　青山三郎

「おめでとう。」「ありがとう。」鴨池球場で決勝戦のあと、いろいろな方から、こう声を掛けられました。「優勝できずに申し訳ありませんでした。」と答えると、「いやぁ、立派だった。」と、喜びに満ちた声が返ってきました。

決勝戦で「山高限に月影落ちて…」の校歌が聞けなかったのは残念に違いありませんが、選手たちが最後まで闘志に燃えて、七点差からあと一点差まで迫った奮闘ぶりに、みんな感激していました。そして、また多くの方々が自分たちも勇気づけられた、と異口同音にいわれました。この声は、鹿屋高校の保護者、卒業生だけでなく、幅広く聞かれました。まさに「鹿屋は一つ」、「大隅は一つ」を実感することが出来ました。

私が高校に入学した時の校長式辞の一節が今でも頭から離れません。「君たちは大隅の最高学府に入った。大隅の役に立つように勉強してほしい。」と話されました。今回の野球部の準優勝は、鹿屋高校がその位置にあることを見事に示しました。後輩たちに教えられた気持ちです。

その位置にあることは、誇りであると同時に、任務も大きいということです。

野球部の諸君おめでとう。そして、ありがとう。

ＰＴＡ会長　三嶋　晃

全校応援や、たくさんの皆様の声援の中、手に汗にぎる熱戦の連続。決勝戦で見せてくれた粘り強さは、鹿屋高校の存在を県内はもちろん、全国にアピールしてくれました。今回の準優勝という快挙は、学校の歴史として後世に語り継がれるものです。野球部の皆さん、夢と勇気、感動をありがとう。

父母の会会長　高畠悦郎

この大会を通じて、鹿屋高校の生徒の皆さん、先生方、ＯＢの方々、そして地域の方々からご声援や励ましの言葉等をいただき、ありがとうございました。野球部父母の会を代表いたしまして、心より感謝申し上げます。大隅半島の進学校である鹿屋高校がここまでやるとは、最初は思いもしませんでした。有力校が次々と破れていく中で、くじ運にも恵まれたと思いますが、試合を重ねるごとに「強さ」を発揮してくれました。限られた練習時間の中でよくぞがんばった。このことは、他の公立高校にも大きな夢と勇気を与えたと思います。準々決勝以降は全校応援もしていただきスタンドから見ていても感動を覚えました。これまで「甲子園」という言葉をこれほど身近に感じたことはなく、とても大きな「夢」を見させていただきました。今大会の野球部の活躍で、多くの方々が感動を体験なさったのではないかと思います。あらため

て高校野球の素晴らしさを感じました。

応援団長　岩田千代子

十六年ぶりのベスト八を決めた翌日に、私たち十三名の応援団は急きょ結成されました。準決勝では十三人増えて二十六人で全校応援の運営にあたりました。

私たちはもちろん、先生方にとっても初めてのことで最初はなかなか上手く活動することができませんでした。戸惑いもあり、正直、自分たちに千人規模の人をまとめきれるか不安でした。ですが、全校生徒の協力により、どの高校にも負けないくらいの応援を、野球部のみんなに送ることができました。私たちをここまで動かした原動力は間違いなく野球部全員の頑張りです。最後までボールを見つめ、仲間を信じ、諦めないことを教えてくれた野球部に心から「ありがとう」と言いたいと思います。そして、全校応援に協力して下さったすべての方々に感謝しています。私たちにとって忘れられない最高の夏になりました。

野球部監督　山内昭人

今大会は、鹿屋高校野球部にとっても、私にとっても忘れられない大会となりました。本校野球部としては初となる準優勝という素晴らしい成績を残せたのは、選手の頑張りだけではなく、大会期間中にいただいた多くの応援のおかげもあると思います。保護者の方々をはじめ、OBの方々、地域の方々など本当にたくさんの方々に力をいただきました。応援していただいたすべての方々に心より感謝致します。

三週間に及ぶ長い大会期間中、選手たちは疲労やケガなどを抱えながらも本当に良く頑張ってくれました。ただ目の前の試合に全力を出す、野球を心から楽しむことを目標に全員が気持ちを一つにできたことが好成績につながった一番の要因だと思います。まさに、「心が技を超える」ことを体験できた大会でした。また、「甲子園出場」をあと一歩で逃した悔しさもひしひしと感じた大会でした。この悔しさをバネに新チームでは「甲子園出場」を目標に練習に励みます。三年生は新たな闘いの場で勝利をつかみ取ることを願っています。今後とも鹿屋高校ならびに野球部に対するご支援を心よりお願い申し上げます。

鹿屋東中校長　立石　望

大隅半島が燃えていた。勝ち進むごとに甲子園初出場への夢が広がった。決勝戦三回終了時点で一対八、これまでかと思った。しかし、このままでは終わらなかった。篠原君の力投、チーム一丸となっての連打、猛反撃。七点のビハインドから一点差まで詰め寄る驚異的な粘り。

気迫に満ちた選手たちの顔、笑顔で選手を迎える監督の顔、声を限りに応援する生徒・地域の方々の顔、みんな輝いていました。甲子園に行ける、行って欲しい。誰もがそう思い、願ったに違いありません。

この夏、多くの人に最高の感動を、そして、後に続く後輩や野球少年たちに夢と希望を与えてくれた鹿屋高校野球部に心から大きな大きな拍手を送りたいと思います。感動をありがとう。

主将　高畠　翔

「野球を楽しもう」この言葉をモットーに夏の県大会に臨みました。一戦一戦が本当に気の抜けない試合でしたが、いつの間にか決勝の舞台に立っていました。大声援に感動し、気分は最高でした。あと一歩のところで甲子園の夢を逃したことは残念でしたが、準優勝という結果は多くの人たちのサポートのおかげであり、感謝しています。一生忘れられない最高の夏になりました。

副主将　楠原昭平

この夏どのチームより鹿屋高校は楽しんで野球をしていたと思います。みんなで楽しんで試合に臨もうと、みんなの思いがひとつになっていたと思います。目の前の一戦一戦に集中して戦ってきました。それが、準優勝につながったのだろうと思います。また、ベスト四からの全校応援では、その人数の多さに最初は戸惑いましたが、応援が力になり、自分の力が十分に発揮できたと思います。

準優勝という結果は、鹿屋高校全員で勝ち取った素晴らしいものだと思います。

投手　篠原秀平

今大会を振り返ると、自分たちは試合毎に強くなることができ、心から野球を楽しむことができました。全校応援のころには何処のチームにも負ける気がせず、高校野球生活の中でも最高に楽しい時間を過ごすことができました。こんな気持ちになれたのは全校応援をしてくれた生徒の皆さんのおかげだし、先生方や両親の支えがあったからこそだと思います。本当に皆さんに感謝いたします。

新主将　野間隼史

今年の夏の大会は、鹿屋高校の準優勝という素晴らしい結果に終わりました。

一戦一戦、試合をする毎に、団結力が増し、強くなっていくような気がしました。プレー中は笑顔を忘れず、楽しみながら試合をすることができました。

憧れであった全校応援は、歓声がものすごく、とても盛り上がり、力になりました。応援してくれた方々に感謝します。